

2011 秋彼岸会講演会・水鷺の会二周年記念

# 生死を超える道

二〇一二年九月24日25日の秋彼岸会は、水鷺の会周年を記念して、沖繩から志慶眞文雄先生におこしいだき、長ノ木本坊 三津田支坊で講演会、蔵本通支坊でシンポジウムを開催しました。

生死とは迷い

その間水鷺さんを支え続けてこられた方で、水鷺さんにとっては大恩人。沖繩で小児科医院を開業される傍ら、同所で浄土真宗の聞法道場「まなさし仏教塾」を主宰されていきます。そして今回、シンポジウムのコーディネーター（進行まとめ役）を買って出て下さった佐田尾信作（当時『中国新聞』洗心面担当・現文化部長）さんは、お二人の共通の友人。二人を引き合わせ、水鷺さんが後に得度して僧侶となった時も、まなそれが縁となつてきた水鷺の会も、いつも陰ながら支え続けてくださっています。

（志慶眞）私は十歳の時、自分がいつかは死ぬ、この世から消えてなくなることになり、何をしてても虚しく感じられ、どうしたらいいのかわからなくて、小学校から大学まで眠れない苦しい日々が続きました。

そんな中、気づいたこと

は、逆にこの状態で死ななかつたら、このまま千年万年死ななかつたらそれこそ地獄。死ぬことも虚しいが、実は今を生きていけないことが一番の問題だということに気がつきました。



長ノ木本坊の様子。

## 生死を超える道

生死とは仏教では迷い。

迷わせているのは私の自我。我執。生死を超えるとは迷いを超えるということ。それはどうしたら超えられるか。

二種類あつて一般世間では「越」。人生とはどうせこんなもんだよと自分の思いを固めてえいやと越える。仏教は「超」。

仏教は、法（ダルマ・真理）によつて正しく超える。これによらなければ解決はつきません。

田中美知太郎先生は「死の自覚が生への愛だ」とおっしゃった。死は今をどう生きるかに直結している。滅びの人生をどう超えてゆくか、親鸞聖人も釈尊もこのこと、生死

死にすべき道が中心。それは仏法の眼目。それは『歎異抄』にある「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という「ただ念仏」する世界。これが生死を超える道だと親鸞聖人はいわれている。

## 生と活

私は生活を二つに分けて説明します。一つは「活」。これはパンをどう手に入れるかという問題。私たちは衣食住をいかに手に入れるか、朝から晩までほとんどここにかかずらつている。もう一つは「生」の問題。これは、パンを食べても死にますよという問題。「活」が満たされても死ぬという問題は残る。それはどうするのか。生死を超えるとはこれに関わる問題です。

「活」のレベルでは地位も名誉も財産も健康もあれもこれもほしい。ないよりあつたほうがいい。しかし、ないよりあつたほうがいいというレベルでは「生」の解決は付かない。ぜひともなけ